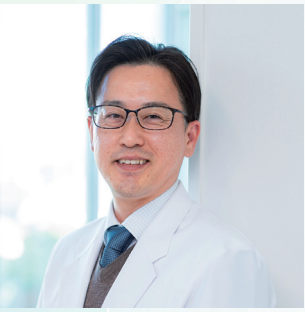
令和7年3月発行

神奈川県立がんセンター広報誌 Vol. 92

がんセンターだより

がんゲノム診療センターの取り組みと最新のがん遺伝子パネル検査



がんゲノム診療センター長
がんゲノム診療科部長
廣島　幸彦

がんゲノム診療センターは、県内の医療機関と連携しながら、がんゲノム医療の中心として設置されました。がんの個別化治療を推進するため、専門のスタッフが患者さんの診断や治療をサポートしています。

当センターでは、がん細胞の遺伝子を詳しく調べる「がんゲノムプロファイリング検査」を実施しています。この検査は、患者さんのがんに特有の遺伝子変異を分析し、最適な治療法を見つけるためのものです。2019年8月から検査を開始し、年々受検者が増加しています。2023年度には609件の登録があり、より多くの患者さんに遺伝子レベルでの診断が提供できるようになっています。

検査の結果は、専門の医師や研究者が集まる「エキスパートパネル（EP)」で慎重に検討され、患者さん一人ひとりに合った治療法を提案します。当センターは2019年9月に厚生労働省から「がんゲノム医療拠点病院」に指定され、2020年度からは自院でEPを運営し、連携病院とも協力しながら診療を進めています。

日本のがんゲノム医療は、この数年間で大きく発展しました。2019年6月に「がん遺伝子パネル検査」が保険適用となり、当初は2種類の組織検査（NCCオンコパネル、FoundationOne CDx)のみでしたが、2021年には血液を使ったリキッド検査(FoundationOne Liquid CDx)が加わり、検査できる範囲が広がりました。現在では、全国で毎月約2,000件の検査が行われています。

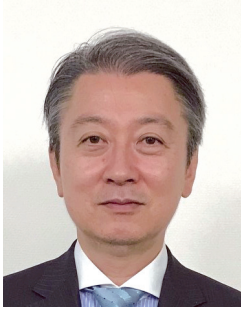
さらに、2023年には新しい2種類のがん遺伝子パネル検査（Guardant360：リキッド検査、GenMineTop：組織検査)が保険適用となり、従来の検査では適切な治療法が見つからなかった患者さんにも、新たな治療の可能性が生まれています。現在、組織検査は3種類、リキッド検査は2種類の計5種類が保険適用となっており、患者さんの状態に応じて最適な検査を選択することが重要です。

当センターでは、これからもがんゲノム医療の発展に貢献し、より多くの患者さんが適切な治療を受けられるよう努めてまいります。がんゲノム医療についてご関心のある方や検査を希望される方は、お気軽にご相談ください。

診療科紹介

泌尿器科・前立腺センター

泌尿器科部長兼前立腺センター長　中井川　昇



泌尿器科・前立腺センターでは、前立腺癌、腎癌、膀胱癌、腎盂・尿管癌、精巣腫瘍など、泌尿器領域の悪性腫瘍に対する高度な診断・治療を提供しています。

2024 年 7 月より、手術支援ロボット“ダヴィンチ”が 1 台から 2 台体制へと強化されたことで、診断が確定している前立腺癌や腎癌の患者さんには、受診からおよそ 1 か月以内での手術を提案できるようになりました。患者さんの治療を迅速に進めるため、どうぞ安心してご紹介ください。

1　前立腺癌と前立腺センター

毎年、前立腺癌と診断された患者さんや疑いのある患者さん 1,000 名以上が紹介されており、全国的にも多くの症例数を誇ります。スムーズな診断・治療を実現するため、泌尿器科、放射線治療科、放射線診断科、病理診断科が連携する「前立腺センター」を設置しています。手術はすべてダヴィンチを用いたロボット支援手術を実施しています。手術待機期間の短縮により、2023 年には約 170 件の前立腺癌手術を行いました。また、当センターは全国で 7 か所に設置されている重粒子線治療施設の一つであり、県外からの患者さんの受け入れも多く、年間約 400 件の前立腺癌の重粒子線治療を実施しています。

2　精巣腫瘍・胚細胞腫瘍

精巣腫瘍・胚細胞腫瘍の診療に積極的に取り組んでおり、年間約 20 例の精巣摘出術を行うだけでなく、進行性の症例に対して化学療法や手術療法を組み合わせた集学的治療を提供しています。2023 年には 20 例弱の進行症例の治療を実施しました。この症例数も全国的に多く、豊富な経験をもとに最適な治療を提供しています。

3　腎　癌

年間約 100 名の腎癌患者さんが紹介されており、ダヴィンチや腹腔鏡による低侵襲手術を中心に外科的治療を行っています。当センターには転移を伴う進行症例が多く紹介されてきます。2023 年には、そのような患者さん約 30 例に対し、免疫チェックポイント阻害剤や分子標的治療薬を用いた全身薬物療法を導入し、外科的治療や体幹部定位照射と組み合わせた集学的治療を実施しました。

4　膀胱癌

年間約 100 名の患者さんが紹介されており、そのうち 30 名弱に対してダヴィンチを用いた膀胱全摘術を実施しています。ロボット支援手術による膀胱全摘は、術後の回復が早く、患者さんの QOL（生活の質）の向上にも貢献しています。膀胱癌に対しても、手術だけでなく、化学療法や放射線治療を組み合わせた包括的な治療を提供しています。

遺伝診療最近の話題

がんになりやすい体質を調べる多遺伝子パネル検査

遺伝診療科部長
成松　宏人

当センターの遺伝診療で、多遺伝子パネル検査を受けられる方が増えています。遺伝子パネル検査とは、一度にたくさんの遺伝子を調べる検査のことです。多遺伝子パネル検査では体の設計図である遺伝子の中に、がんになりやすい遺伝的な要素を持っているかどうかを調べることができます。今までは、数個の限られた遺伝子しか一度に調べられませんでしたが、この多遺伝子パネル検査では数十個の遺伝子を一度に調べることができます。

当センターで行っている、がんの組織を調べる「がんゲノム」で行われるがん遺伝子パネル検査とは別の検査で、自分の血液にある正常な細胞を検査することで、「体質」を調べることができます。

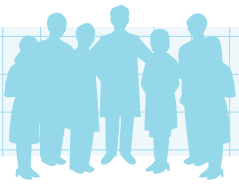
「血のつながった、親戚に色々ながんが多い」

「従来の数個の遺伝子を見る検査で、遺伝性腫瘍とは診断されなかったが、他のがんになりやすい体質が心配」

というような場合は、この多遺伝子パネル検査の対象になる場合があります。

ご希望される患者さんが検査を受ける前には、遺伝診療科で遺伝カウンセリングを受けていただくことが必要です。このカウンセリングの中で、詳しくお話をお伺いして、この検査の対象になるかどうかを確認します。さらに、患者さんには、実際に検査を受けるかどうかの意思決定支援をします。多遺伝子パネル検査は、まだ新しい検査方法ですが、今後ますます普及していくことが予想されます。対象になりそうな患者さんがいらっしゃれば、お気軽に遺伝診療科へご相談ください。

がんセンターのAYA世代への支援もしくは妊孕性について



AYA（Adolecent and Young Adult;思春期･若年成人）世代は15～39歳を指し、成長発達の過程、学業、就労、恋愛、結婚、出産など様々なライフイベントを経験する人生のステップにあることから、がん自体の治療のみならず、多種多様な生活・社会背景への特別な配慮を要することが特徴です。厚労省の「がん診療連携拠点病院等の整備」では、AYA世代患者さんの支援体制も要件の一つとして挙げられています。当センターでも多くのスタッフから支援に関する課題が挙がり、2024年10月よりAYA支援チームが活動を開始しました。チームメンバーは、主に診療する医師、看護師、臨床心理士／公認心理師、MSW、薬剤師、管理栄養士、事務職とし、定期ミーティング及び週1回の病棟ラウンドを行なっています。職員一人ひとりが自信を持って対応できるよう、知識の啓蒙や症例検討のできる体制を構築することを目指します。引き続き、AYA世代患者さんの悩みや困りごとに対して、自分らしい生活と両立してがん治療に向き合えるよう、活動して参ります。

退職の挨拶

●副院長　森永　聡一郎

長らく勤めて参りました当センターもこの三月いっぱいで定年退職を迎えることとなりました。今までご支援頂き、お世話になりました地域医療機関の先生方、スタッフの皆様には、この場を借りて心より感謝、御礼申し上げます。2005 年の赴任以来、安全で安心な、エビデンスに基づいた医療を患者さんに提供すること、新規医療の開発に積極的に取り組んでいくこと、をモットーに日々の診療に取り組んで参りました。おかげさまで、JCOG, JASPAC 等日本を代表する臨床研究グループの一員として、膵癌や胆管癌の術後補助化学療法のガイドラインを書き換えるような重要な臨床試験に微力ながら貢献することができましたし、某ランキング雑誌で、2021 年には膵癌手術件数で全国 3 番目にランキングされるほど多くの患者さんをご紹介頂いております。これも皆様のご支援あってのことと、感謝の思いでいっぱいです。本当にありがとうございました。この伝統は、後任の山本部長をはじめとするスタッフに引き継がれ、低侵襲な腹腔鏡下手術が導入され、ロボット手術の導入も着々と進行中です。今後とも、当センター肝胆膵外科へのご支援、ご指導、ご鞭撻をよろしくお願い申し上げるとともに、退職のご挨拶とさせて頂きます。

●頭頸部外科　古川　まどか

2025 年 3 月の退職を前に、ご挨拶申し上げます。在任中の出来事などをいろいろと思い起こしておりました。その中でも最も思い出深いことは、2013 年 11 月の旧病院から現病院への一斉引っ越しです。各部門で非常に綿密な計画を立てながらの引っ越しで、皆で協力し合い、次々とタイムスケジュール通りに進行したこと、そして、病院玄関前に整然と並ぶ民間救急車（図 1）は圧巻でした。お元気な患者さんには計画的に退院していただき、重症者やベッド上安静が必要な患者さんは病院の玄関で状態チェックを行ったのちに救急車で搬送、新病院では受け入れたのちに速やかに新規該当病棟に移送するといった作業が粛々と行われました。私自身は旧病院側の玄関で患者さんを送り出す係を務めました。旧病院玄関に入ると見えるステンドグラス（図 2）はとても美しく、多くの患者さんから「このステンドグラスをみると心が落ち着きます」といった言葉が聞かれたものでした。成人病センター時代から次々と増改築を繰り返した結果、大きな複合体となっていた旧病院と衛生研究所（図 3）も今は取り壊され、代わりに運転免許センターの立派な建物が建っています。二俣川駅もとても立派で便利な駅となり、このエリアの進化とともに過ごしてきたことに改めて感じ入っています。皆様に心から感謝申し上げます。

図 1

図 2

図 3

令和６年度
神奈川県保健衛生表彰受賞

神奈川県保健衛生表彰とは、神奈川県内の医療、環境衛生、食品衛生、薬事、地域公衆衛生など、多年にわたり保健衛生の向上に尽力した個人、団体、施設の功績を広く県民の皆様に顕彰するため、昭和35年から実施されているもので、今回で65回目になります。

2024年11月27日に神奈川県庁にて令和６年度表彰式が行われ、神奈川県立がんセンターからは、砂田麻奈美　副院長兼看護局長、井手紳介　放射線治療技術科部長、および堀口早苗　検査科長の３名が受賞いたしました。今後も当センター一丸となって、医療と保健衛生の向上に精進して参ります。

総長表彰

2024年12月５日、総長表彰の選考発表会を行いました。

医療サービス向上や病院経営の改善などに関する取り組みの功績について、10チームから発表がありました。

総長賞は、外来化学療法室の「外来化学療法室の運営向上の取り組みについて」となりました。

病院長賞は、消化器内科（肝胆膵）チーム、臨床研究所所長賞は、患者支援部がん相談支援センターチーム、看護局長賞は、放射線治療技術科チーム、事務局長賞は、患者支援部入退院センターチームがそれぞれ受賞しました。これらの取り組みを今後も医療サービスの向上や業務効率改善に繋げて参ります。

治験ニュース

HPはこちらから

新規治療開発支援センターより

当センターでは、2025年１月現在で、呼吸器内科85件、乳腺外科39件、消化器内科（肝胆膵）38件をはじめとして、14の診療科で233件の治験を実施しています。登録中の治験一覧は、当院のホームページに診療科別に掲載してありますので、ぜひご覧ください。また、治験の参加に関するご相談については、「がん相談支援センター」で承りますので、ご利用いただけますと幸いです。

新規治療の開発・発展のため、引き続き、先生方のご支援を賜りますようお願い申し上げます。

第14回市民公開講座
肺がん治療の今
～専門医が語る最新治療法～

▶市民公開講座開催のご報告

2024年11月4日はまぎんホールヴィアマーレにおいて、第14回市民公開講座「肺がん治療の今：専門医が語る最新治療法」を開催いたしました。

当センターは、都道府県がん診療連携拠点病院として、神奈川県内のがん医療の中心的役割を担っており、様々な種類のがんに対し、最先端の技術による検査や治療、研究を行っています。がんの患者さんのみならず、多くの県民の皆さんにがんについての正しい知識を持っていただくことは、がんの予防や早期発見につながります。このため、2009年から県民の皆さんに向けて市民公開講座を開催してきました。

本講座も第14回を迎え、当日はたくさんの方々にご参加いただき、また場内より多くの質問をいただくなど、活気あふれる講座となりました。今後もこのような講座を開催し、がん治療に関する様々な情報を多くの県民の皆さんに提供できるよう努めてまいります。

緩和ケア週間

2024年10月6日～11日まで「緩和ケア週間」を行いました。このイベントの目的は、「世界ホスピス緩和ケアデー」である10月の第2土曜日を最終日とした1週間を「緩和ケア週間」とし、イベント開催などを通して啓蒙普及活動を行うことです。

当センターでは、3年ぶりに対面で開催し、多くの患者さん、ご家族等にご参加いただきました。イベントは、ボランティアによる音楽会、ポケットティッシュの配布、薬剤・栄養・社会福祉に関する個別相談、東洋医学によるリラクゼーション、緩和ケア病棟見学ツアーや患者さん、ご家族等への応援メッセージの掲載等でした。患者さんからは「ボランティアのコンサートが再開されて嬉しい」、応援メッセージに対する「このような気持ちで患者のことを考えてくれると知り、嬉しい」等の評価をいただきました。引き続き患者さん、ご家族等への緩和ケアの普及に努めて参ります。

編集後記

2人に1人が「がん」になる時代。医療は進歩し続け、多くの患者さんが完治あるいは長期に診療を受けながら普通の生活を続けられるようになりました。そこには今回ご紹介した遺伝子診療、新規薬開発のための治験が重要な役割を果たしています。ただそれだけでなく、働く世代の支援（AYA世代支援）や治療早期からの緩和ケアなどサポート体制の充実が欠かせません。当センターの取り組みを紙面から読み取っていただければ幸いです。長年当センターの診療を牽引し退職する医師からの「ひとこと」も掲載しました。彼らが築いたがんセンターの伝統を若き医師たちが引き継いでまいります。　　副院長兼地域連携室長　岸田　健

編集・発行
神奈川県立がんセンター　TEL 045-520-2222㈹
〒241-8515 横浜市旭区中尾2-3-2　https://kcch.kanagawa-pho.jp/